

中世野田の金石文

(ちゅうせいのだのきんせきぶん)



天正 18 年銘文船形八幡懸仏
市指定有形文化財

表題の金石文(きんせきぶん)とは、金工品や石造物に刻まれた文字、すなわち、銘(めい)とか、銘文(めいぶん)といわれるものを指します。さらに、この解釈を拡大して、紙以外の材料に記された銘をも含めて取り扱われるようになっていきます。歴史研究の上で、文書(もんじょ)や記録などと並んで、それを補い、車の両輪の一方を担う役割を果たしています。多くは、宗教上の遺品にみられるという特徴をもっています。

ここでは、野田市域に存する中世の金石文について述べてみたいと思います。目下のところ、石造物としては板碑(いたび)(石板塔婆(いしいたとうば)ともいう)が、金工品としては懸仏(かけぼとけ)が知られています。

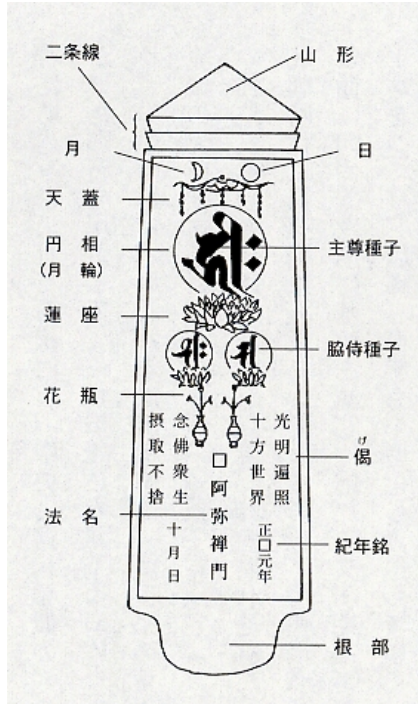
はじめに、板碑をとりあげてみましょう。板碑は、現在、墓地などに供養のために建てられている、木製の塔婆と同じ性格のものと理解されています。武蔵国秩父(むさしのくにちちぶ)から産出される緑泥片岩(りよくでいへんがん)を板状にはぎとり、整形加工した石造物で、武蔵国を中心に分布しているところから、武蔵板碑と呼ばれています。野田市域発見の武蔵板碑は、完形品から破片まで数に加えると約 350 基にのぼります。このうち、紀年銘を読みとることのできる板碑が、193 基あります。もっとも古い板碑は、三ツ堀から発見されており、鎌倉時代の弘安元年(1278)の年号を刻んでいます。千葉県下では 7 番目に古い板碑となっています。14 世紀のはじめ頃と 15 世紀の後半に、比較的多く建てられています。板碑に表現された仏尊は、阿弥陀一尊(あみだいつそん)や阿弥陀三尊(あみださんぞん)が多くを占め、94 パーセントに及んでいます。阿弥陀如来(あみだによらい)に対する信仰が盛んであったことが知られます。室町時代に入ると、西光院(さいこういん)に存する板碑のように、念仏講中(ねんぶつこうちゅう)によって建てられる板碑が登場し、さらに、15 世紀の半ば頃から、古利根川流域を中心に、月待(つきまち)や庚申待(こうしんまち)の講中による板碑が造立されてきます。月待板碑は、木間ヶ瀬志部前堀(きまがせしべまえぼり)と吉春にて発見されており、庚申待板碑については、東金野井に 2 基確認されています。うち、西福寺(さいふくじ)の天正 14 年(1586)の板碑は、本地方における武蔵板碑の下限を示す資料として注目されています。

金工品については、船形八幡神社(ふなかたはちまんじんじゃ)の懸仏が知られ、平成 2 年 3 月には市の文化財に指定されています。懸仏とは、神社社殿内の梁(はり)などに懸けられ、おおむね、円形の鏡板に祭神とゆかりのある仏尊をあらわした金工品です。八幡神の場合ですと、阿弥陀如来が該当します。船形八幡神社の懸仏の大きさは、約 29cm をはかり、その中心に阿弥陀如来を安置し、その両脇の向って右に観音菩薩(かんのんぼさつ)、左に勢至菩薩(せしぼさつ)を鑄出(ちゅうしゅつ)しています。なお、表面の両側を見ると、天正 18 年(1590)10 月 13 日、飯塚豊後守(いづかぶんごのかみ)という人物によって奉納されたことがわかります。さらに、裏面には、「前嶋縫殿これを鑄る」とあり、製作者の名前が刻まれています。しかし、奉納者である飯塚豊後守と鑄物師前嶋縫殿については今のところ、いかなる人物がよくわかっていません。

《詳しくは…》

* 川戸 彰 2007 「野田市の板碑」 野田市史研究 第 18 号 野田市

* 野田市郷土博物館編 1990 「野田市の指定文化財Ⅲ」（野田シリーズ 19） 野田市郷土博物館



弘安元年銘の板碑（三ツ堀）



西光院の板碑（野田）



吉祥寺の十三仏板碑（関宿元町）



二十一仏板碑（東金野井）



吉春遺跡出土の板碑（吉春）